

派遣者番号	管R3K07	氏名	上村 保志
研究主題 —副主題—	聴覚障害特別支援学校における英単語綴り力の向上についての試み		
派遣先	帝京大学 教職大学院	担当教官	爲川 雄二
所属	教育庁指導部指導企画課	所属長	栗原 健

キーワード：聴覚障害 英語 綴り

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

東京都教育施策大綱（第4次）では、外国語を当たり前に使いこなすことや、多様な人々と協働する力を持ち、豊かな国際感覚を身に付けることなど、世界をけん引していくことができるグローバル人材育成の必要性を示している。

これからの社会を生きる子供たちが外国語をコミュニケーション手段の一つとして使いこなすことは、近い将来、必要不可欠な力になる可能性がある。また、日本に留まらず、諸外国の多様な背景や文化をもつ人々と意見を交換し、協働できる人材を育成することは、学校教育における重要な課題と言える。

聴覚障害のある児童・生徒は、英語を視覚的に学ぶことが中心となる場合が多い。しかし、音声（音韻認識）なしに英語を覚えることは容易ではないと思われる。

廣瀬ら（2017）は、英単語の音と綴り間の関係性の複雑さによる、習得困難や意欲低下への影響を述べている。また、九州豊教育ネットワーク（2015）は、英語担当教員が困っていることの一つとして、「英単語の覚えさせ方がわからない」ことを挙げている。

本研究においては、児童・生徒が英単語を覚えることに苦手意識をもたないよう教員が指導を行うこと、そして、この指導をどの教員でも行うことができるよう汎用性が高いものを目指すことを目指し、その方法として、ローマ字力を生かせるような指導実践を行うこととした。

教材は、平成30年3月に東京都教育委員会が発行した『読めた』『わかった』『できた』読み書きアセスメント～中学校版～』記載のテストや英単語学習ワークを用いることとした（以下、ワークと記述する）。このワークの主たる対象は発達障害のある生徒であるが、音と文字との関係を理論的に学ぶことができるものであり、英単語の習得を高められる可能性があると考えた。そこで、ろう学校において、本ワークを用いた指導を行い、英単語綴り力の向上について、その効果を検証した。

2 研究の方法

(1) 指導実践

対象者を都立聴覚障害特別支援学校に在籍の中学部第1学年6名及び高等部第1学年12名の計18名とした。令和3年6月下旬から12月上旬にかけて、本ワークのうち、英単語規則語ワーク、英単語不規則語ワークの2種類、計10通りのワークを1つのターンとして、2ターン行った。

(2) 調査

以下のテストを事前（7月）、中間（10月）、最終（12月）の計3回行い、それぞれ正答数を集計した。意識調査については、事前及び事後のみ実施した。

ア ローマ字の書きテスト

3音節の無意味語をローマ字表記にする課題

イ 英語視覚性語彙テスト

文字列を黙読し、3～4文字の有意味単語を斜め線で区切る課題

ウ 英単語力テスト

3社の中学校英語教科書（第1学年）記載の単語のうち、共通する30個の単語について、読み方と綴りを表記させる課題

エ 意識調査

英語学習への関心や英語への認識等の質問

3 研究の結果

(1) 英単語テストの結果

英単語力テストの読み方と綴りの正答数を1以上伸ばした生徒数（中学部と高等部との総計）について、ワーク掲載の英単語と、非掲載の英単語に分け、図1及び図2に示した。

読み方については、中間調査の結果ではワーク非掲載英単語の方が、掲載英単語よりも正答数を伸ばした生徒数が多かった。しかし、事後調査の結果では、掲載英単語の正答数を伸ばした生徒数が明確に多くなった。綴りについては、中間調査と事後調査の結果ともに、ワーク掲載英単語の方が、非掲載英単語よりも正答数を伸ばした生徒数が多かった。

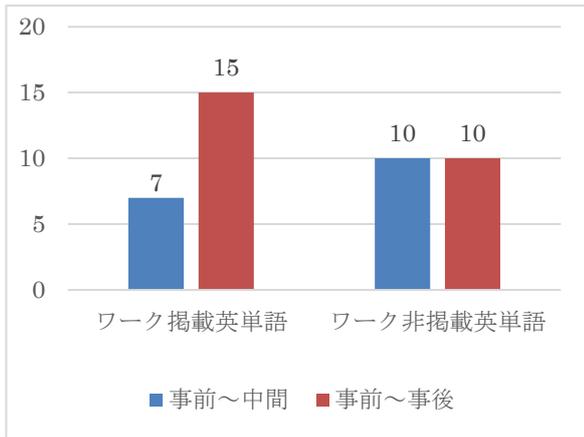


図1 英単語（読み方）の正答数を1以上伸ばした生徒数の内訳

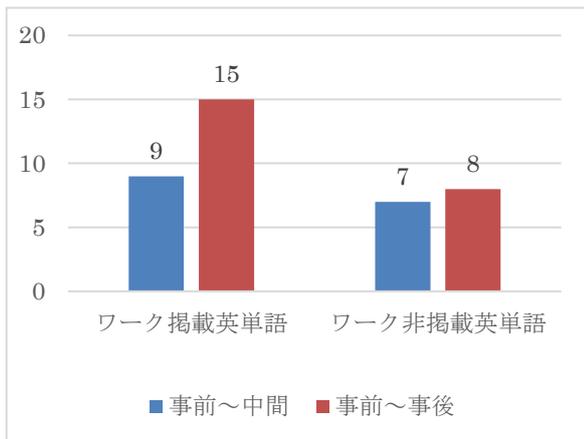


図2 英単語（綴り）の正答数を1以上伸ばした生徒数の内訳

(2) 英単語綴りの誤答分析

学部ごとに英単語綴りの誤答についてエラー分類を行った。分析対象となる回答は、記入があった回答のうち、「読み方が正答している、かつ綴りが誤っている」ものとし、綴り未記入は対象外とした。エラー分類については、牧野・宮本(2002)、上岡・北岡・鈴木(2018)が作成した英単語綴りエラー分類と判断基準を参考に作成した。視覚性錯書は鑑映文字や脱字のあるもの、音韻性錯書は音の類似があるもの、視覚性/音韻性錯書はどちらにも分けづらいものとした。

中学部と高等部ともに、回答と正答の間に音の類似性がある音韻性錯書にエラー分類された誤答が、事前調査から事後調査にかけて増加した。一方で、読み方と綴りの関連のない、その他に分類される誤答が減少した。また、視覚性/音韻性錯書に分類した誤答の中にも、音韻性錯書に近い回答も複数あった。

4 研究の考察

調査結果から、生徒によって本ワークが英単語綴り力の向上に効果があること、そして、繰り返し学

習することにより、英単語綴り力の向上への効果が増すことが示唆された。

一方で、ローマ字力が英単語綴り力に影響するという点においては、調査結果は、対象生徒には必ずしも当てはまるわけではないことを示した。例えば、「ビッグ」を「dog」と綴るような、ローマ字知識が英単語綴りにつながっていない事例が複数見られた。このような綴りの誤りが生じる原因として、英単語自体を一つの絵図のようなものとして記憶し、ローマ字や英単語を子音や母音という音の組み合わせとして認識していないことが推察される。

田中・眞崎・横山(2013)が、「ひとつの言語のもつ文字体系は、背景にその文字文化が反映されていると言えることから、ローマ字の指導が、国語科で扱われており、日本語のためであるとしても英語のアルファベット体系と容易に関連づけられるものである。」と述べているように、ローマ字知識はアルファベットへの意識をもたせるために有効であると思われる。調査で明らかになった小学部で学んだローマ字知識が中学部・高等部でも定着しているという事実は、読み方が分かれば、綴り力が更に向上する可能性があることを表している。

本研究で実施したように、英単語学習において、英単語学習ワークを用いて、ローマ字知識を生かしながら繰り返し学習することで、聴覚障害のある生徒も文字と読み方（音）との関連についての意識が高まり、さらには英単語綴り力の向上を見込むことができる。

5 今後の展望

第一は、「口形・発音指導」の改善である。マスク着用により細かな指導がしづらい環境であったが、発音すること自体に積極的でない生徒が多数いるように思われた。音声によるフィードバックに困難さがある生徒が、発音に対して意欲をもちづらいことは想像に難くない。フィードバックの方法の一つとして、「聴覚障がい者のためのサ行発音練習用フィードバックアプリ」(木村・川村, 2017)が考えられる。ただし、フィードバックには時間の確保が必要であり、人権に十分配慮し、個別に発音指導を行う必要がある。

第二は、「汎用化と普及」である。現在は、英単語学習ワークで扱う英単語に限りがあるため、生徒個々の英語力に合わせて英単語を変更できるように、ワークをデジタル化・汎用化し、普及を図っていきたい。デジタル化により、生徒はシートを選択したり、自ら目標を設定したりするなど、「自ら学習を調整すること」ができるようになり、生徒の「個別最適な学び」につながると考える。